

ハニワと土偶の近代

東京国立近代美術館（竹橋） 2024. 10. 01～12. 22



本展は、美術を中心に文化史の舞台に踊り出た「出土モチーフ」の系譜を、明治時代から現代にかけて追及して、「ハニワ」「土器」「土偶」に向けられた視線の変遷を探ることにより、歴史をひもときその複雑な機微を知ることである。

1950年代の美術作品には、なぜか出土遺物のイメージを伴うものが多く登場して、ジャンルを問わず、伝統系・前衛系の別なく、画家、彫刻家、工芸家、デザイナーたちが、ある特定の時代「ハニワ」や「土偶」に夢中になり、絵や彫刻の中にそれらを描き込んだ。この現象に気づいたのは、「イサム・ノグチ」と「岡本太郎」で、それまで考古学資料にすぎなかった出土遺物が「芸術」として扱われたという言説がある。そして、「出土遺物」は、美術に限らず工芸、建築、写真、映画、演劇、文学、サブカルチャーに至るまで、幅広い領域でモチーフとして、さまざまなブームを巻き起こしてきた。

都路華香（つじかこう）《埴輪》（部分）1916年 紙本着色 二曲一双 上図



斎藤 清《土偶 (B)》1958年 森山朝光《陽に浴びて》1958年
雑誌『芸術新潮・はにわのひみつ』特集 2024年10月号
毎日新聞・朝刊 『ハニワと土偶の近代』記事 2024.09.23